

## P-189

### A病院手術室における避難訓練の現状と課題

名古屋第一赤十字病院 手術室

○水尻由希子<sup>1)</sup>、清末 智美、大鐘 隆宏、片岡 知美

【はじめに】A病院の手術室では災害時に備え、毎年手術部主催で2回、看護部主催で1回の避難訓練を実施している。昨年、手術室における訓練の方法や内容を検討するために、訓練前後に参加者を対象に防災に対する意識、避難経路の認知度などのアンケート調査を実施した。今回はアンケート結果から訓練の効果と今後の課題を示したい。

【結果と考察】訓練前、『防災に関心があると思う』の間で『思う』『ある程度思う』に回答した者が57%いた。元々、関心は低くないが訓練後は82%に上昇している。これは、訓練をしたことで新たな不安や疑問を持ち関心が増したと考えられる。それを裏付ける結果として『防災訓練を行うべき』の間で訓練後に100%のスタッフが訓練の必要性を感じている。避難経路の理解は『ある程度知っている』『どちらでもない』『あまり知らない』の回答者が訓練前後でもあまり変化がなかった。また『患者を避難させる方法』の間でも類似した結果が出た。避難経路や避難方法は被害場所や患者の状況で変動すると考えられる。そのために、訓練を重ねることで実際の避難時には色々な知識が必要であるという認識が生まれ、『知っている』と回答する者が増加しなかったと考える。具体的な被害状況の設定で訓練を行うことで今後『知っている』への回答者が増加すると考える。

【課題】以上の結果を参考に、全スタッフが一定の知識を持ち、患者が安全な経路で避難出来るように避難訓練を通し技術の習得が必要である。そのためには避難経路の知識を持つことが課題である。患者を避難させる方法に対しては、具体的な状況設定で訓練を積み重ねることで知識の向上を図りたい。

## P-190

### 健診機関における医療安全への取り組み

日本赤十字社熊本健康管理センター 保健看護部<sup>1)</sup>、  
日本赤十字社熊本健康管理センター 健康増進部<sup>2)</sup>、  
日本赤十字社熊本健康管理センター 診療部<sup>3)</sup>

○盛川恵美子<sup>1)</sup>、中野 裕美<sup>2)</sup>、湯浅由美子<sup>1)</sup>、長島不二夫<sup>3)</sup>、  
大竹 宏治<sup>3)</sup>、川口 哲<sup>3)</sup>、緒方 康博<sup>3)</sup>

【はじめに】当センターのリスクマネジメント部会は、全職員を対象とした医療安全に関する研修会の開催、定期的な救急法短期講習会の実施等のリスク管理やヒューマンエラー対策に取り組んでいる。月に1回の定例会では、インシデント報告の検討や事業別の「安全教育」「職場巡視」「インシデントの報告・統計・分析」についての活動報告を行っている。

【方法・結果】平成24年度のインシデント報告の分析を行なった。その結果、インシデント件数は79件であった。インシデントの発生場所は、79件中50件が人間ドック部門、17件が集団健診であった。職種別でみると、臨床検査技師、放射線技師、看護師、保健師の順で多く発生しているという結果であった。経験年数別にみると1年未満と11～15年、16年以上が多い結果であった。またインシデントの内容については、当センターでは与薬等の治療に関する業務が少なく、問診、検査、判定、指導、情報管理等の一連の業務量が多いため、「検査項目の確認ミス」「検査順番の間違い」「入力ミス」等のチェックミスが79件中53件と多い結果であった。さらにチェックミスの内容を検討した結果、「検査項目の確認ミス」「検査順番の間違い」については集団健診で多く発生しており、人間ドックでは、「入力ミス」「報告書等の間違い」「受診者の間違い」等であった。

【考察】今回インシデント報告の統計分析を行なったことで、チェックミスが多いという健診機関のリスクやヒューマンエラーの特色が明確になった。さらに組織横断的にRCA分析やKYT活動を実施することで、適切なリスク管理やヒューマンエラー対策の一助となることが期待できる。

## P-191

### 臨地実習におけるロールプレイングによって得られたある学生の反応

大津赤十字病院 循環器科<sup>1)</sup>、大津赤十字看護専門学校<sup>2)</sup>

○西 良樹<sup>1)</sup>、徳田 麻生<sup>1)</sup>、川瀬 久美<sup>2)</sup>

はじめに：臨地実習においてロールプレイングを取り入れたことで学生の患者理解の機会となり、学生のモチベーション、自主性の向上が認められたのでここに報告する。2、目的：学生の患者理解を深める為の方法としてロールプレイングを実施した。3、実際：

【倫理的配慮】対象者に本検討の趣旨を説明、また院内の倫理審査委員会にて了承を得た。対象：3年制専門学校の3年生2名、患者：老年期男性、糖尿病性腎症。血糖測定を設定場面とし、学生間で患者・学生役を交替しながらロールプレイングを実施した。4、結果：実施後の学生同士での意見では「痛みを伴う処置なので適切な手技で実施してあげたい」、「失敗しないように気を付けた」と、手技の感想がみられた。指導者は、以下の助言を行った。「血糖測定は状態管理に必要ではあるが、患者は食事前の試験だと感じ、結果に一喜一憂することもある。その理由を考えながら表情や言動に気を配ることで患者理解につながる」。ロールプレイング終了後、学生は透析導入が必要である説明を受け涙している患者に遭遇する。その時の学生の思いを教師から聴取しカテゴリー化した結果、看護師としての他者理解が出来た意見が聞けた。その後、看護計画の修正や患者家族（妻）を含めた関わりといった行動変容がみられるようになった。5、考察・まとめ：ロールプレイングによる患者体験だけでは患者を理解するのは不十分であったと考えられる。指導者が意図的に学生の気付いていない部分への助言を行うことで、学生自身の気付きを引き出すことが出来たと考える。

## P-192

### A赤十字看護専門学校における1年次看護倫理授業の在り方の検討

松山赤十字看護専門学校 看護

○喜多村定子、渡邊八重子

【はじめに】本校では、看護倫理を課外授業に位置づけ、各年の担当教師により講義や演習が実施されていたが、どこで、何を、どのように教え、それをどのように展開させて到達目標に導いていくのかといった教育体系になっていない課題があった。そこで、平成24年度から、3年間を通しての看護倫理教育プログラムを作成し各学年用の自己評価も作成した。今回、1年生の自己評価から1年次の看護倫理授業をどのように行えばよいのか示唆が得られたので報告する。

【研究目的】1年次の看護倫理授業の在り方を明らかにする  
【結果】自己評価の自由記載から68文の有効回答を得た。そして「看護倫理への理解」「看護師に倫理が必要な理由への理解」「人としてどうあるべきか」「自己の行動化」「学習効果」「感想」のカテゴリーが抽出された。「自己の行動化」が最も多く全体の39.7%、最も少なかったのは「人としてどうあるべきか」の2.9%であった。

【考察】1年次においては、なぜ人間社会に倫理があるのか、そして、日々の生活のいろいろな側面に倫理が存在していることを伝え学ばせ、生活するとはどういうことなのかも考えることができるようにしていかなければならない。学生の生活・社会背景なども分析して、どの時期に何を学ばせていくのかを考えていくことが必要である。

【結論】1. 1年次に何が善であるかを考えさせて、倫理とは何かの理解へと繋げていく。2. 学生の学びたい、できるようになりたいという思いを大切に、思考力を訓練していくことが必要である。3. 看護倫理と他の学科目との関連性も考慮しつつ、いつ、誰が、どのように、何を教えていけばよいのか検討していかなければならない。